様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２７６７

研究課題名（和文）特別支援学校で働く看護師がいきいきと働き続けられるための支援

研究課題名（英文）Support for Nurses Working in Special Needs Schools to Continue to Work Lively

研究代表者
長谷川　由香（Hasegawa, Yuka）

佛教大学・保健医療技術学部・准教授

研究者番号：４０６１４７５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けるには，他職者や保護者との関係性や情報共有，雇用形態の見直しが必要であることが示唆された．これまで述べられてきた担当教員や養護教諭だけでなく，学校長や学校医、主治医との関係性や情報共有が，看護師のワークエンゲージメント（仕事に関連するポジティブで充実した心理状態であり、活力、熱意、没頭によって特徴づけられる）に影響を与えていることが明らかとなった．また，賃金や雇用形態などの雇用条件もワークエンゲージメントに影響を与えていた．特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けるためには，看護師が他職者や保護者と関係性を構築し、情報共有できる体制の見直しが求められる．

研究成果の学術的意義や社会的意義
特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けるには，他職者や保護者との関係性や情報共有，雇用形態の見直しが必要であることが示唆された．これまで述べられてきた担当教員や養護教諭だけでなく，学校長や学校医、主治医との関係性や情報共有が，看護師のワークエンゲージメントに影響を与えていた．特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けるためには，看護師が他職者や保護者と関係性を構築し、情報共有できる体制の見直しが求められる．それには，学校長のリーダーシップが欠かせない．特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けることが，医療的ケア児の安心・安全な教育環境の保障とケアの質の向上につながる。

研究成果の概要（英文）：The results suggest that in order for nurses in special needs schools to continue working actively, it is necessary to review their relationships and information sharing with other professionals and parents, as well as their employment status. It was found that the relationships and information sharing with school principals, school doctors, and attending physicians, in addition to the teachers and school nurses in charge as described so far, influenced nurses' work engagement (a positive and fulfilling psychological state related to work, characterized by vitality, enthusiasm, and immersion). Employment conditions such as wages and employment status also affected work engagement. In order for nurses in special-needs schools to continue to work with vigor and enthusiasm, it is necessary to review the system that allows nurses to build relationships and share information with other professionals and parents.

研究分野：小児看護学

キーワード：医療的ケア　特別支援学校　看護師　ワークエンゲージメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会におけるノーマライゼーションの理念の普及を背景に、障碍をもった子どもたちの教育環境を保障するための制度が整えられつつある。文部科学省と厚生労働省による「盲・聾・養護学校における医療的ケアに関するモデル事業」(2003 年)を受けて、2004 年、文部科学省と厚生労働省より「盲・聾・養護学校におけるたんの吸引等の取り扱いについて」の合意がなされた。そのなかで医療安全の確保が確実になるよう看護師の適切な配置など条件が示された。しかし、特別支援学校において、医療的ケアの中心的役割を果たす看護師の離職が問題となっている。

先行研究から、特別支援学校における医療的ケアを担う看護師の課題は**1)看護師個人の要因、2)労働環境の要因、3)他職者との協働の要因**に関する要因の 3 つに大別される。看護師個人の要因としては、看護実践能力（道重ら 2012）や病院での看護師の役割と異なる特別支援学校の看護師の役割遂行への戸惑いもある（鈴木ら 2014)。環境の要因としては、特別支援学校等に一定の正規雇用看護師が必要と提言されているにもかかわらず、正規の看護師雇用は一部地域に限定されている（文部科学省　2012)。他職種との協働の要因については、教育の場における看護への理解不足、看護師・教員・養護教諭の連携および協働に関する問題が指摘されている（泊ら　2012)。

全国的に見ても、日常的に医療的ケアが必要な幼児児童生徒数は 2006 年以降全体としては増加傾向にあり、障害の重度重複化が進むことも予測される（小児看護学会 2008)。しかしながら、人員配置や学校側の支援体制等の問題が指摘されている。たとえば 2015 年 5 月下旬、特別支援学校「先進県」において特別支援学校で看護師全員（非常勤）が一斉辞職した。医療的ケアが必要な児童・生徒 33 名中 10 名程度が一時登校できなくなり、同年 11 月現在も看護師確保に至っていない。辞職の直接的な原因として、保護者からケアの遅れに対し「うちの子を殺す気か」等の批判を複数回にわたり受けたことが県教委から報告された。しかしその背景には、保護者との関係性の構築や看護師実践力だけでなく看護師の要員不足（看護師 8 名が必要とされるところ 6 名であり、全員が非常勤雇用）の事情があったと言われている。特別支援学校で働く看護師への支援は、子どもの教育の権利を守るための緊急の課題である。離職者が多い一方で、長年にわたり生きがいをもって特別支援学校で働く看護師もいる。どのような要因が、特別支援学校の看護師の職務満足を支えているのか。具体的に求められている支援は何かを明らかにしていきたい。

２．研究の目的

本研究の目的は、特別支援学校の看護師がいきいきと働き続けるために要因間の関連性・因果の方向を明らかにし、最も必要性の高い支援は何かを具体的に提示することである。

先行研究から、特別支援学校における医療的ケアを担う看護師の課題は**(1)看護師個人の要因 (2)労働環境の要因　(3)他職者との協働の要因**の3つに大別される。仮説として、看護師個人の要因と労働環境の要因が他職種との協働を推進するものであり、協働がうまくいっている場合は看護師の職務満足度は高いと考える。他職種との協働に着目したインタビュー調査により、看護師個人の要因・労働環境の要因が具体的に導き出される。

これらの要因の効果を個別に検討した例、質的に列挙した例はあるが、影響因子の相対的重要

性と因果関係を実証的に解明した研究は申請者の知る限り見あたらない。本研究は、全国の特別支援学校の看護師の職務満足度に影響する複数の要因の相対的な影響の大きさを定量化することで、優先度の高い支援が明らかとなり、インタビュー調査から得られたデータから具体的な支援内容が示唆できる。以下は、本研究の下位目的である。

目的 1）看護師の語りをデータとして、カテゴリー化を行い、特別支援学校における協働の構成要素を抽出し、それぞれの事例を分析することを通じて、協働システムの枠組みを提示する。

目的 2）全事例における協働の成否について改めて考察することを通じて、協働をめぐる共通の課題を明らかにするとともに、協働を可能にするための具体的な方策について検討する。

目的 3）全国の特別支援学校の看護師を対象に質問紙調査から、特別支援学校で働く看護師のワーク・エンゲージメントと職場環境との関連を明らかにする。

目的 4）2018 年のインタビュー調査以降の政策と特別支援学校の現状とを照らし合わせ、本研究の今日的な意義を確認する。

追加目的）コロナ禍での質問紙調査であったため、コロナ禍における特別支援学校の課題を明らかにする。

３．研究の方法

目的 1）2）

研究参加者

のべ 7 校の特別支援学校に勤務経験のある看護師 11 名である。

調査方法

1）調査期間：2016 年 9 月～2018 年 3 月

2）調査協力者依頼までの手順

便宜的標本抽出法のうちの指名式標本抽出法によって研究参加者をリクルートした。具体的には、研究の趣旨を理解し連絡に同意した者を紹介してもらい、研究者自身が電話（またはメール）にて研究の趣旨と自由意思での参加を説明し、研究参加へ本人の意思を確認した。協力の承諾が得られた研究参加者には説明文と同意書、質問紙を郵送し、面接時に持参するよう依頼した。

3）データ収集方法

研究参加者には、特別支援学校における協働の定義は「専門職者（学校長、一般教員、医療的ケアコーディネーター、教員、養護教諭、学校医と医療的ケア対象児の主治医等）や保護者が、お互いの役割や責任を理解し、共通の課題に対してともに取り組んでいくシステム（プロセスも含む）」と紙面および口頭で説明した。

データ収集は一部質問紙を用いた半構成的面接を行った。データ収集の場所は、研究参加者の近隣に或る面接室や会議室等を用いた。

4）質問内容

研究参加者には、インタビューガイドに基づき、協働がうまくいったと思った事例とその要因、あるいはうまくいかなかったと思った事例とその要因について尋ねた。うまくいった、あるいはうまくいかなかったとの判断は、研究参加者に委ね、自由に語ってもらった。語りの抽象的な部分は、具体的に語るよう促した。また、一つの事例に対して、その頻度や類似した事例がなかったかも確認した。インタビュー内容は、研究参加者の許可を得た上で録音し、逐語録として文章に起こした。

分析方法

質的データから枠組みを構築するのに適している Miles＆Huberman（2013）の分析方法を用いた。

倫理的配慮

本研究は、関西看護医療大学の研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 60）。

目的 3）4）追加目的

研究参加者

全国の特別支援学校 957 校の看護師を対象とした。

調査項目

本調査では、特別支援学校で働く看護師の現状を明らかにするために以下の項目を設けた。

1）研究対象者の基本属性：(1)免許種、(2）年代、(3)臨床経験年数、(4)特別支援学校での経験年数、(5)現職場での経験年数、(6)雇用形態、(7)1 週間の勤務日数

2）特別支援学校の概要：(1)全校児童・生徒数、(2）医師の「指示書」を受けて医療的ケアを実施している児童・生徒数、(3)看護師の構成、(4)医療的ケアの内容と人数

3）看護師の業務：(1)看護師の業務内容、(2）看護技術

4）他職者や保護者との関係：(1）他職者や保護者との関係性、(3）他職者や保護者との情報共有

5）職場の環境：(1)給与に満足しているか、(2)雇用形態に満足しているか、(3)看護師の人員は充足しているか、(4)受け持つ医療的ケア児の人数は適切であるか、(5)複数の医療的ケアが必要な児が多いと感じているか、(6)重症な医療的ケア児が多いと感じているか、(7)学内外の研修には満足しているか、(8)看護師の専門性が発揮されているか、(9)特別支援学校での仕事に手ごたえを感じているか、(10)今の職場でこれからも働きたいか

6）ワーク・エンゲージメント（ワーク・エンゲージメントは，仕事に関連するポジティブで充実した心理状態であり，活力，熱意，没頭によって特徴づけられる）

7）コロナ禍における特別支援学校の課題

データ収集方法

調査校の学校長に研究協力依頼文書を郵送する際に看護師に対して、研究協力依頼文書、無記名自記式質問紙、返信用封筒を同封し、郵送法で回収した。調査期間は、2021 年 6 月末～8 月末日であった。

分析方法

1） 全項目において単純集計を行った。

2） ワーク・エンゲージメントの合計と各項目を肯定群、非肯定群の２群に分け Welch の t 検定での分析を行った。

3） コロナ禍における課題の自由記載については、内容分析を行った。

倫理的配慮

本研究は、佛教大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号 2020-36-B）

４．研究成果

目的 1）2）

協働の構成要素として、【看護師から見た協働メンバー】、【看護師の業務】、【看護技術】、【情報共有】、【職場の環境】の５つのカテゴリーと 23 のサブカテゴリーが抽出された。これらの図式化されたシステムの枠組みについての解釈と意味付けに関する考察を行った。具体的には、各事例のカテゴリーやサブカテゴリー間の相互連関の具体的なあり様を分析しながら、諸要素がどのように作用した場合に協働に支障が見られた、あるいは協働が促進されたかを分析し、全事例を重ねることで、協働システムの枠組みを構築した。結果、協働は、《人間関係システム》と

《背景システム》という２つのサブシステムから成るシステムと見なすことができた。事例には個別の背景があり、課題は特殊であったが、協働に支障が見られる事例から、1）協働メンバーが看護師の職務を認識できていない、2）職種や立場の違いによる異なる価値観から対立が生じている、3）医療的ケアに関する学校長のガバナンスに問題があることの３つの共通する課題が明らかになった。また、協働が促進した事例からは課題解決の手がかりが見出された。課題解決に向けた具体的な提案として、1）看護師が「生活援助」に参加する、2）定期的な会議に看護師も参加する、3）看護師は、専門職として提案する、ことが重要であることが示唆された。

目的 3）

ワーク・エンゲージメントの合計と職場環境では、9 項目のうち、〔給与に満足している〕、〔雇用形態に満足している〕、〔受け持つ医療的ケア児の人数は適切である〕、〔学内外の研修には満足している〕、〔看護師の専門性が発揮されている〕、〔特別支援学校での仕事に手ごたえを感じている〕の 6 項目に有意差が認められた。一方、〔看護師の人員は充足している〕、〔複数の医療的ケアが必要な児が多いと感じている〕、〔重症な医療的ケア児が多いと感じている〕には有意差は認めなかった。ワーク・エンゲージメントの合計と協働体制、継続意向にも有意差が認められた。

ワーク・エンゲージメントの合計と関係性では、他の看護師、担任教員、医療的ケア担当教員（保健主事）、学校長、教頭、保護者、学校・医療的ケア指導医、医療的ケアコーディネーター、総合的に見た他職種者や保護者の 9 項目に有意差が認められた。一方、養護教諭、主治医には有意差は認めなかった。

ワーク・エンゲージメントの合計と情報共有では、担任教員、医療的ケア担当教員（保健主事）、学校長、教頭、保護者、学校医・医療的ケア指導医、主治医、総合的に見た他職種者や保護者の 8 項目に有意差が認められた。一方、他の看護師、養護教諭、医療的ケアコーディネーターには有意差は認めなかった。

目的 4）

文部科学省は、学校における医療的ケア児をめぐる課題解決に向けた取り組みを行っている。進められている施策は、確かに本研究の協働がうまくいかなかった事例の要素、例えば、【看護技術】や【看護師の業務】、【職場環境】や【情報共有】と関連する内容であり、どれも重要な施策である。【看護師の業務】も明文化され、看護師が医療的ケアの技術提供者ではないことが示された。リーダー的役割を担う看護師の配置や看護師を含めた医療的ケア安全委員会の設置、医療的ケア指導医を委託する等の施策は、【職場環境】である雇用形態の見直しや【情報共有】の機会となる。【看護技術】に関しては、医療的ケア指導医の存在は、看護師の不安の軽減や技術の向上に役立つと考える。しかし、現状では、まだ十分な成果は得られていないことが明らかとなった。

追加目的

コロナ禍における特別支援学校の課題として「児童・生徒は自ら予防行動がとれない」、「感染予防対策に必要な物品や設備の不足」、「正しい感染予防対策がとれているか確信が持てない」、「自分が感染源になるのではないかという不安」、「感染予防対策に伴う看護師の業務量の増加」、「教員との感染予防対策についての認識のずれ」、「看護師のワクチン接種の遅れ」、「保護者との感染予防対策についての認識のずれ」等の課題があがった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 長谷川由香	４．巻 70
２．論文標題 特別支援学校における医療的ケアをめぐる協働の捉えなおし－事例についての看護師の語りから見えるシステムとしての協働－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 育療	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長谷川　由香	４．巻 15
２．論文標題 特別支援学校における「医療的ケア」の法制化における 教員と看護師の役割の変化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佛教大学　保健医療技術学部紀要	６．最初と最後の頁 45－54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鬼頭泰子，長谷川由香，黄波戸航	４．巻 5
２．論文標題 特別支援学校の看護師が抱く援助場面における思い	５．発行年 2020年
３．雑誌名 看護実践の科学	６．最初と最後の頁 78-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷川由香	４．巻 10
２．論文標題 「特別支援学校における協働」の概念分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 関西看護医療大学紀要	６．最初と最後の頁 48-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川由香，鬼頭泰子，井上寛子，早川りか	4．巻 42
2．論文標題 新型コロナウィルス感染拡大時における特別支援学校の課題ー特別支援学校で働く看護師へのアンケート調査からー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本看護科学学会誌	6．最初と最後の頁 240-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.42.240	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上寛子，長谷川由香	4．巻 80
2．論文標題 特別支援学校における看護師と子どもを取り巻く関係者との情報共有の実際と課題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 小児保健研究	6．最初と最後の頁 619-625
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 長谷川由香
2．発表標題 特別支援学校における医療的ケアの経緯と今後の課題A特別支援学校で働く看護師の定着と教員との協働の関係
3．学会等名 第36回日本看護科学学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 長谷川由香，井上寛子，鬼頭泰子，黄波戸航
2．発表標題 特別支援学校で働く看護師と多職種との協働のシステム
3．学会等名 第66回日本小児保健研究学術集会
4．発表年 2019年

１．発表者名 井上寛子，長谷川由香
２．発表標題 特別支援学校における看護師と子どもを取り巻く関係者との情報共有の実際と課題
３．学会等名 第66回日本小児保健研究学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷川由香　井上寛子　早川りか　高間さとみ
２．発表標題 特別支援学校における医療的ケアの経緯と今後の課題A特別支援学校で働く看護師の定着と教員との協働の関係
３．学会等名 第38回日本看護科学学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 長谷川由香
２．発表標題 特別支援学校で働く看護師の現状
３．学会等名 第40回日本看護科学学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	早川　りか (Hayakawa Rika) (50737575)	武庫川女子大学・看護学部・准教授 (34517)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　寛子 (Inoue Hiroko) (60803898)	広島国際大学・看護学部・助教 (35413)	
研究分担者	高間　さとみ (Takama Satomi) (90588807)	鳥取大学・医学部・講師 (15101)	
研究分担者	小嶋　理恵子 (Kojima Rieko) (20404402)	名桜大学・健康科学部・上級准教授 (28003)	
研究分担者	鬼頭　泰子 (Kitou Yasuko) (70433232)	佛教大学・保健医療技術学部・准教授 (34314)	
研究分担者	黄波戸　航 (Kiwado Wataru) (40779592)	姫路獨協大学・看護学部・助教 (34521)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関